

2019 TOEIC® セミナー 報告書

学生の将来を後押しする
大学の取り組み

～ TOEIC Bridge® を活用した英語教育の仕組みづくり ～

2019年9月14日(土) TKPガーデンシティPREMIUM仙台西口

学生の将来を後押しする大学の取り組み ～ TOEIC Bridge® を活用した英語教育の仕組みづくり ～

2019年9月14日(土) TKPガーデンシティ PREMIUM仙台西口

事例発表 ① 東北学院大学 1

東北学院大学における必修英語教育の改革

教養学部言語文化学科 教授、英語教育センター 副所長 渡部 友子 氏

事例発表 ② 松本大学 9

教職員が連携したディプロマ・ポリシー達成のための 英語教育カリキュラムマネジメントの目的と効果

教務課 係長 上條 直哉 氏

事例発表 ③ 岩手県立大学 19

主体的な学びを引き出す英語カリキュラムと TOEIC® Programの活用

高等教育推進センター 准教授 高橋 英也 氏
高等教育推進センター 助教 江村 健介 氏

主催：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会



おかげさまでTOEIC® Programは、40周年を迎えることができました。
これからもTOEIC® Programは、英語コミュニケーション能力を公平公正に
評価する世界共通の基準として、進化し続けます。

東北学院大学における 必修英語教育の改革



東北学院大学 教養学部言語文化学科 教授、英語教育センター 副所長 **渡部 友子 氏**

■ 地方都市の私立総合大学として

本学では、現在、必修英語教育の改革に取り組んでいます。本日はまず改革をする前までどのような状況であったかをご紹介します。その後に、改革が決まってどんな準備をしたか、どのような仕組みをつくったかをお話しし、最後に、実施した結果の課題についてお話しします。

はじめに本学の概要についてご紹介します。東北学院大学は、1886（明治19）年に仙台神学校として教育を開始し、1949（昭和24）年に文経学部をもつ大学としてスタートしました。

現在は、文学部・教養学部・経済学部・経営学部・法学部・工学部の6学部で構成され、英語は全学部必修です。学生数は1学年3,000人ほどで、地方の大学としては比較的大きな規模となっています（資料1）。

（資料1）

| | |
|------|--|
| 文学部 | 英文学科、総合人文学科、歴史学科、教育学科 |
| 経済学部 | 経済学科、共生社会経済学科 |
| 経営学部 | 経営学科 |
| 法学部 | 法律学科 |
| 工学部 | 機械知能工学科、電気電子工学科、環境建設工学科、情報基盤工学科 |
| 教養学部 | 人間科学科、言語文化学科、情報科学科、地域構想学科 |
| 大学院 | 文学研究科、経済学研究科、経営学研究科、法学研究科、工学研究科、人間情報学研究科 |

■ 改革前の状況

それでは、まず必修英語教育の改革前の状況についてお話しします。私が赴任した2008年当時は、学部・学科単位で英語教育が行われ、各学部に1年生と2年生の英語の授業がありました。1学年3,000人ほどの学生がいたので、クラス数もかなりの数にのぼっていました。

どのクラスをどの先生に持ってもらうかの采配は教養学部が行い、授業の担当は専任の教員と非常勤の先生にお願いしていました。しかし、どんな内容にすれば良いのか、評価をどうするかについては全て各教員の裁量に任せられていました。つまり「このクラスをお願いします。あとはよろしく」というやり方だったのです。

■ 教えるにいく、学びづらい英語力の差

本学では、一般入試のほかに多様な推薦入試を行っているため、入学時の学生の英語力にはかなりの差があります。上は英検2級を超えている、下は中学校の内容もよく分かっていないかも、という開きです。

そうした中で2学部が行っていたクラス分けは、名簿の順番に切り分けるものでした。英語力を測定していなかったということです。その結果、同じクラスに英検2級の学生と中学校の内容がよく分かっていない学生が一緒になり、担当教員はどこに向かって教えれば

良いのか分からないという、とてもやりにくい状態でした。

やりにくかったのは教員だけではありません。学生にとっても学びにくい状況だったと思います。自分は英語力が結構ある、でも隣の学生は全然分かっていない。そうした中で一緒に学ぶのは、英語ができる学生にとってはかなりきついと思います。実際、やる気をなくした学生が数多くいたようです。

一方で、何らかの英語テストを行い、点数順に切ってクラス分けをしている学部・学科もありました。しかしこの方法では、aクラスに入れば、自分がその学部や学科で上位にいることは分かりますが、英語力がどれくらいなのかははっきりしません。使用されたテストが教員自作であり、客観性に欠けるということも問題でした。

■ 健全ではない学習環境の状態が続く

もう1つの問題は、運営責任者が不在だったことです。

中には、授業の内容を指定してくる学部・学科もあります。しかし、「〇〇学系の内容でやってください」という程度の依頼しかなく、具体的に何をしたいかという指示がないのです。

一方、教員配置をする担当者も、先生に担当クラスを伝えるだけです。例えば「来年、先生には経済学部のgクラスをお願いします」という依頼の仕方です。これでは先生も何をして良いのかよく分からなかっただろうと思います。gクラスは下の方かなという見当はつきませんが、どのくらいのレベルなのかは分かりません。また、a・b・c・dはレベルの順ではない学科もあったのです。したがって、教育環境としても、学習環境としても、あまり健全ではない状態が続いていたと言えます。

■ 客観的な外部テストを導入

これではマズいのではないかとすることは、誰もが感じていたと思います。私も学生の英語力をきちんと測定した方が良いと考え始めていました。ただ、それをいきなり全学規模で行うのは難しかったので、まず私が所属している教養学部でテストを試みようとして提案しました。客観的な外部テストを導入したいので予算を付けてくださいと学部長にお願いしたところ、理解を得られ、やってみようということになったのです。

そこで、最初は教育測定研究所のCASECを導入しました。これは、コンピューターを使って行うテストで、1問目が正解か不正解かで次の問題のレベルを変え、それを繰り返して最終的に学力を測定するという方式です。これならば、能力差が大きい集団でも1つのテストでカバーできるだろうと思い、試してみることにしました。また、Webを使って実施できること、40分ほどでテストの結果が出ることも大きな利点でした。

スタートしたのは2014年度の新入生からです。入学が決まった時点で、順次、自宅でWeb受験をしてもらいました。当時の教養学部の入学者は約450人。早い人は12月、1月ぐらいに入学が決まるので、その時点で案内を出し、一般入試の学生は3月下旬頃に受験し始めました。

その結果、教養学部の入学者の能力は、上は英検準1級レベル、下は4、5級レベルという大きな幅のあることが改めて確認されました。教養学部は文系と理系の学科が混在しています。そのため、このテストは全学のサンプルにもなりました。

■ 教学改革委員会で英語学力が話題に

このテスト実施に向けて準備していた頃、全学レベルの教学改革委員会では「学士力」についての議論が行われていました。2013年度のことです。本学で4年間学び、いったいどんな能力を付けて卒業させるのかという出口保証の議論となったのです。これは全

学的な問題ですが、特に英語が問題となりました。例えば法学部では、入学前に法学を学んでくる学生は少ないので、スタート時点で学力がほぼ同じレベルです。そのため4年間の学びを計画しやすいわけです。しかし、英語は入学時にすでに大きな差があるので、同じ出口保証はできないということになったのです。

そこで、英語は入学時に学力をきちんと測定し、英語力のない学生はこの辺まで目指そう、英語力の高い学生はもっと上まで伸ばそうという現実的な目標を立てるべきだということになりました。

■ 入学生の英語力の把握と全学共通必修英語について検討

これを受けて、2013年9月に「共通必修英語教育改革検討小委員会」を発足させました。具体的にどのようなプログラムをつくるかを検討する全学組織の委員会です。学務担当副学長を座長とし、学務部長、6学部長、英語教員5人(文学部2人、教養学部3人)が参加しました。

会議の内容は、入学生の英語力の把握と、全学の共通必修英語などです。入学生の英語力の把握は実施予定だった教養学部でのCASECテストの結果を参考に考えることにしました。全学の共通必修英語については、理念や中身、指導内容、レベル、開講形態・頻度、卒業時に保証すべき英語力などのテーマを半年間にわたって話し合いました。その中で、全学の英語教育を統括する「英語教育センター」をつくることを決め、センター設置へ向けての準備が2014年度に始まりました。

■ 達成目標をCEFR-J のB1～B2レベルに設定

共通必修英語については、高校の英語教育の変革を踏まえ、読解中心(文法訳読)から脱却し、4技能

を伸ばす指導をすることに決めました。また、専攻に合わせた英語教育は1～2年次には行わないことにしました。

達成目標の設定はCEFR-Jを参考にしました。CEFR-Jとは、CEFR(欧州言語共通参照枠)をベースに、日本の英語教育での利用を目的に構築された英語能力の到達度指標です。A1・A2・B1・B2・C1・C2という6レベルに分けて評価しています。A1は超初級でA2は初級、B1は中級でB2は中上級、C1は上級でC2は超上級のほぼネイティブレベルです。これを参考に本学に合うよう少し修正して目標を設定し、週1回の授業を4セメスター(2年間)で行うことにしました。

また、目標の大まかな目安として、入学時の英語力をCEFR-Jで1.5レベルほど上げたいと考えました。本学の平均的な入学生はA2ぐらいのレベルですが、それをB1からB2ぐらいまで上げようと思ったのです。これはかなり高い目標だったことが後から分かりますが、当時は可能だと考えました。そして、2年修了時にもう一度測定し、到達度を確認することにしました。

■ 入学時の英語力によるグレード制を導入

枠組みとしては、入学時の英語力によるグレード制を敷き、最上位群と最下位群は特別教育を実施することにしました。最上位群は授業を英語で行い、最下位群には補習を課すというものです。

また、英語の成績に客観的な英語力を反映させることにしました。英検3級レベルの英語力の学生と英検2級レベルの学生に同じ成績が付くのは不公平ではないかという意見を踏まえたものです。英語力の高い人には高い成績が付きやすい仕組みを作ることにしました。

さらに、読む・聞く・書く・話すの4技能を扱うことも決めました。ただし、どれぐらいの配分で行うかは指定せず、教科書も統一しないことにしました。本来は方針や教科書を統一することが望ましいのですが、

本学ではまだできないと考え、そこには踏み込まないことにしました。

■ TOEIC Bridge® IPテストの導入

次は入学時のテストの選定です。まず教養学部で実績のあったCASECは、全学で一斉に実施するのは難しいと判断されました。Web受験できるのが最大の利点ですが、自宅受験では厳正を期すことができませんし、2,800人の入学生を大学のコンピューター室に集めるのも無理だったからです。

そして他のテストをいろいろ探したところ、最終的にはTOEIC Bridge® 団体特別受験制度(IP: Institutional Program、以下IPテスト)が良いのではないかという結論に達しました。その理由は本学の入学生に適切な測定範囲であったことです。CASECの結果である、下は英検4級ぐらいから上は準1級ぐらいまでという成績の幅は、TOEIC Bridge IPテストで測定できる幅とほぼ一致していたのです。

また、1時間の試験で2技能を測定することも、実施しやすいテストであると判断されました。本来は4技能試験を行いたいところですが、現実的には時間がかかってできません。そのため、少ない時間で能力レベルを判定できるTOEIC Bridge IPテストを採用しました。さらには、まずTOEIC Bridge IPテストで慣れてもらい、3年次以降にTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) に挑戦してもらいたいという思いがあったからです。将来への“道をつける”という意味でも良いのではないかと考えました。

■ 2015年5月「英語教育センター」が発足

2015年4月に初めてTOEIC Bridge IPテストを全学実施しました。

しかし、実施してみると大変でした。学生番号、氏名、生年月日、学科番号などの基礎的な情報をちゃんと

マークできない学生が多発したのです。筆記試験を経験せずに推薦で入学してきた学生の中には、マークシートの記入をしたことがなかった者もいたと思われます。受験後の照合と訂正にかなりの負担を強いられたことを覚えています。

テストの結果はクラス分けのために4学部を提供しました。ただしこの時点でのクラス分けは、上位から切り分けるだけだったので、ある学部のaクラスと他の学部のaクラスが同じレベルかどうかは保証されていませんでした。

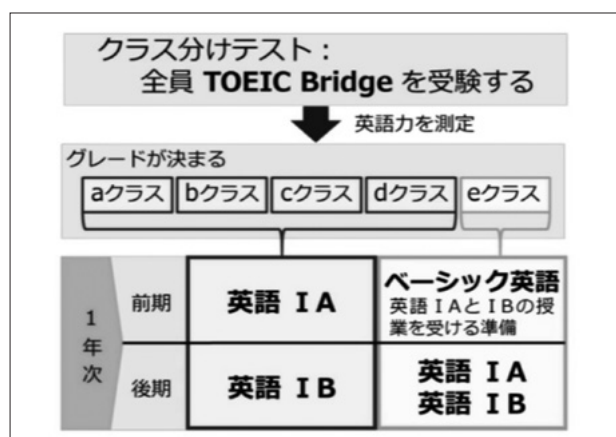
そして、このテストの終了後に「英語教育センター」が発足しました。センター長、副センター長、教養学部の英語教員10人、他学部の代表各1人の構成で、次年の2016年度からは特任講師3人と事務職員が加わりました。

■ 5段階でのクラス編成を実施

その翌年、2016年度に再びTOEIC Bridge IPテストを実施し、このデータを基に2017年度のクラス編成を行いました(資料2)。レベルは上からa・b・c・d・eの5段階で、eクラスは補習があります。右表の数字はクラスの数で、cとdクラスの数が多くなっています(資料3)。

本来はテスト後にクラスの数を決めたいのですが、前年度にクラスを決めて先生を付けなければならない

(資料2)



(資料 3)

| クラス | 得点域 | 経済 | 経営 | 法 | 工 |
|-----|---------|----|----|---|---|
| a | 140以上 | 2 | 1 | 1 | 2 |
| b | 130-138 | 2 | 1 | 1 | 2 |
| c | 110-128 | 5 | 2 | 3 | 4 |
| d | 90-108 | 5 | 3 | 3 | 4 |
| e | 88以下 | 3 | 2 | 1 | 2 |

ので、新入生の学力を予想してクラス分けをしています。そのため、数の少ないa・bクラスが大人数になったり、数の多いdクラスが少人数になるという歪みが生じてしまいました。やはり、学生の学力がある程度安定し、年度ごとの変動が落ち着いてこない、どのレベルを何クラスつくるかの判断は難しいと思います。

■ テストの実施と編成システムの周知活動を開始

このような体制を構築したあと、2017年4月に入学する学生に向けて、周知活動を開始しました。対象は新カリキュラムが導入される経済学部・経営学部・法学部・工学部の4学部です。これらの入学予定者に対し、入学手続きの郵送物の中に、新しい英語教育の説明文を同封して知らせました。「入学初日にTOEIC Bridge IPテストを実施します」「能力別のクラス編成をします」「eクラスは補習があります」「そのため入学前に勉強してきてください」という内容です。また入学時には、本学における英語教育の仕組みを解説した小冊子「英語履修ガイド」も配布しました。

この周知活動により、思わぬ波及効果がありました。新年度開始前の春休み中に、TOEIC Bridge IPテストのための参考書はないか、という問い合わせが大学生協に殺到したのです。これにより、大学生協にTOEIC Bridge IPテストの公式問題集を置いてもらえるようになり、多くの部数が売れるという想定外の現象が起こりました。

■ 所属グレードを成績評価に反映させる仕組みづくり

周知活動の結果、スコアも伸びました。2017年度の入学生の平均スコアは、2016年度に比べて6.8点上がりました。特に、新カリキュラムになった経済学部・経営学部・法学部での上昇が大きく、それぞれ10点、8.4点、8.9点上がっています。

2019年度からは教養学部と文学部(2学科のみ)も新カリキュラムが採用されたので、クラス数を少し調整しました。切り分け方は少し緩めにし、人数によって柔軟に対応できるようにしています(資料4)。

また、所属グレードを成績評価に反映させるシステムも作りました(資料5)。上のクラスに配属されれば良い成績を取りやすくなり、下のクラスに配属されれば頑張っても100点は取れないという仕組みです。なぜそのような仕組みにしたかという、TOEIC Bridge IPテストでわざと低い点を取って下のクラスに入り、そこで100点取った方が楽だと考える学生がいるからです。それを防ぎ、なるべく高い点を取ってくれるように

(資料 4)

| クラス | 得点域 | 経済 | 経営 | 法 | 工 | 教養 |
|-----|-------|----|----|---|---|----|
| a | 下限140 | 2 | 1 | 1 | 2 | 2 |
| b | 下限125 | 2 | 1 | 2 | 2 | 3 |
| c | 下限110 | 5 | 2 | 3 | 4 | 3 |
| d | 下限95 | 5 | 3 | 3 | 4 | 3 |
| e | | 2 | 2 | 1 | 2 | 1 |

(資料 5)

| クラス | 最高点 | 中央値 |
|-----|-----|-----|
| a | 100 | 90 |
| b | 100 | 85 |
| c | 95 | 80 |
| d | 90 | 75 |
| e | 85 | 70 |

○上位グレードほど、よい成績が取りやすい
 ・わざと下位クラスに入ろうとするのを防ぐ意図

誘導する仕組みが必要でした。

また、2年次の進級時にクラスの入れ替えを行うことにしました。前期・後期の成績を平均点にし、aとbの間、bとcの間、cとdの間で上位と下位を少し入れ替えるというものです。それほど多くは移動しません。1クラス数人程度の範囲です。

入れ替えの理由は学習意欲の維持です。頑張れば上のクラスに上がれるというモチベーションを高めるためです。また、最初のテストで実力が発揮できなかったり、配属が適正でなかった場合の調整の意味もあります。

■ 2年次後期には英語力を再測定

先の計画では、2年間の英語教育修了時に到達度を測定することになっていました。これを最初に実施したのが2018年度後期末です。2017年度入学生に対しても一度TOEIC Bridge IPテストを行い、そのスコアを「英語IIB」の最終成績の20%に算入することにしました。

比重を20%にした理由は2つあります。まず高く設定しすぎるとテスト対策の必要性が出てくるので、それを避けたいということ。もう1つは、当日にテストを受けられなくなっても、20%であれば普通の授業で頑張っている人は不合格になりにくい、ということです。

テストの比重をあまり大きくしない、しかし、ある程度の比重を持たせる、そのバランスで20%という数字にしています。

この到達度調査は2019年1月に行いました。ただし、この1年前に試行的にTOEIC Bridge IPテストを実施したところ、上位群の得点が入学時より下がり、下位群では上がるという傾向が出ていました。そこで本格実施では、aクラスの一部に限定してTOEIC L&Rを受験させました。上位群の英語力を正確に測れるのではないかと考えたためです。それ以外の学生はTOEIC Bridge IPテストを受験しました。

TOEIC L&Rの結果は、700点台が1人、600点

台が0人、500点台が15人で、その他はさらに低い点数でした。このスコアをTOEIC Bridgeの得点に換算し、全受験者のスコアを入学時と比較したところ、学科平均で最大8点近く低下しているという残念な結果となりました。

入学時の英語力が入学後に下がることはいろいろな大学で報告されているので、それほど驚くべきことではありません。改めて確認されたということです。ただ、英文学科は微増、教養学部の言語文化学科は増減なしです。この2学科が減らなかったのは英語の授業数だと思います。英文学科と言語文化学科は、週1回の必修以外にも英語の授業があります。

■ 「話す力」や「書く力」の測定も必要

新しいシステムに2年間取り組んで見えてきた課題は、週1回の必修英語を2年間続けても、入学時の英語力を維持することすら難しいということです。

また、普段の英語の授業とTOEIC L&Rで要求される「読み方」とでは少し違うのではということです。つまり、大学で行う読みは、ゆっくり辞書を引いてよく考えるという精読が多い。そうした読み方しか練習していないと、TOEIC L&Rはうまく能力が発揮できないのではと思っています。

試験が長時間に及ぶことも1つの壁だと思います。TOEIC Bridge IPテストは1時間ですが、TOEIC L&Rは2時間です。監督していた教員の話では、最後の方は力尽き、問題を読まずにマークを塗っているだけの学生が結構いたとのこと。受験者がaクラスのみでもそうでしたから、2時間の試験で集中する能力が必要なこともわかりました。また、これからはTOEIC L&Rでは分からない「話す力」や「書く力」の測定も必要かもしれないと考えるようになっていきます。

■ 意欲のある学生に向けた「促し」と「サポート」を

今後は、2020年度に向けて、レベルごとの開講クラス数の調整を行う予定です。当初、eクラスはもっと人数がいるのではと思って多めに設定しましたが、しっかり準備してくる入学生が増えたので、それほどeクラスは作らなくても良くなっています。逆に、上のクラスをもう少し増やすことが必要になってきています。

また、週1回の授業ではなかなか伸びないため、授業外の支援を充実させる必要があると思っています。その1つとして作ったのが「えいごらうんじ」と名付けた相談室です。授業内容の質問から、勉強方法のアドバイス、英会話練習まで、学生の様々な要望に英語教育センターの教員が応えています（資料6）。さらには自習会も、もっと増やしていくつもりです。

問題は3年次以降です。英語は2年で終わりたいという学生が圧倒的に多い一方、もう少し頑張って英語力を上げたいという学生も少なからずいます。就職活動に向けて、TOEIC L&R 500点、600点を目指す、さらに700点を目指すという意欲のある学生に向けて、挑戦してみようという「促し」と「サポート」をしてあげたいと考えています。

以上で私からの説明は終わりますが、もう少し詳しい内容をお知りになりたい方は、『東北学院大学教育研究所報告集』をご覧ください。本学のホームページにも掲載しています。また、入学前の学生を対象とした本学の英語教育についての説明資料や動画も載っています。

（資料6）事務職員がデザインしたキャラクター「えいごら」



質疑応答

Q TOEIC® Programを導入するにあたり、学内をどのように説得したのでしょうか。

A 本学では、英語教育を何とかしようという動きが上から先に起こったので比較的スムーズに運びました。やはり大学全体の組織づくりや制度づくりに動いてくれる人と、英語教育の専門家の両者が協力して動くことが一番うまくいく方法だと思います。

また、英語教育の問題点を知らせるためにはデータが最も有効です。英語教員は普段学生と接しているので問題点を肌で分かっていますが、他の科目の教員はなかなか理解してくれないところがあります。そうした時にはデータで示すのが最も説得力があります。その際も、まず1つの学部や学科で試し、そこで集めたデータを使って提案すると話が進みやすいと思います。

問題は費用です。テストを行う時にはお金の問題が常に付いて回ります。小規模で実施するにしても、お金を調達しなければなりません。やはりデータをきちんと集め、活用することが説得の第一歩だと思います。

Q 学生に対して、TOEIC Bridge® IPテストやTOEIC® L&Rの内容・特徴などの説明はしているのでしょうか。また、受験の仕方などの指導はしているのでしょうか。

A 先ほどご説明した通り、TOEIC Bridgeについては入学前の学生を対象とした本学の英語教育についての説明資料や動画により周知しています。TOEIC L&Rを受験しようという学生はまだ数が少ないのですが、それはどんなテストであるか分からないのが理由かもしれません。そのため英語教育センターでは、何か説明会を行った方が良いのではと検討しているところです。そもそも検定を受けたことがない学生が意外に多いと分かったので、何かしらの誘導が必要だと思っています。

Q TOEIC Bridge® IPテストを受けて、学生はどのように変わったのでしょうか。

A 目に見えて英語に意欲を持ち出したとまでは言えませんが、少なくとも英語のテストを受けたことがなかった学生が初めてテストを受け、何かしらの評価が出たことが意識付けになっていると思います。ほぼ同じような能力を持った学生と一緒にクラスになるので、自分の点と周りの学生の点を比べて一喜一憂している姿も見られます。そうした中で、もっと頑張ろうという学生も少なからずいます。やはり、テストを受けて自分の実力を知ることはプラスになっていると思います。

教職員が連携したディプロマ・ポリシー達成のための英語教育カリキュラムマネジメントの目的と効果

松本大学 教務課 係長 上條 直哉 氏



■ 地域社会に貢献できる人材を育成するために

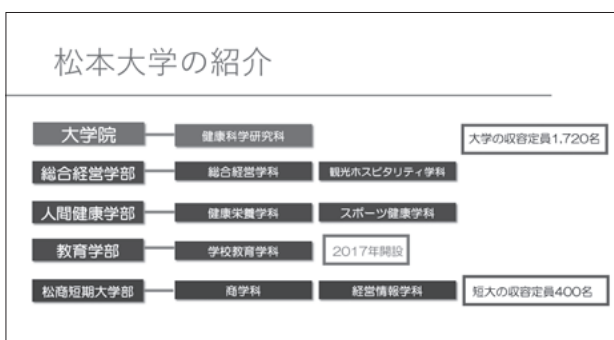
本日は、英語教育の目標を大学全体の目標までどうやって押し上げていくか、大学全体のカリキュラムとして英語教育をどう位置付けていくかについて、教務課職員の視点からお話ししたいと思います。

まず、簡単に本学をご紹介します。

松本大学は、1898（明治31）年、長野県松本市に開設した私塾「私立戊戌学会」（1911年に松本商業学校に改称）を前身とし、2002（平成14）年に開学した大学です。1953（昭和28）年には、松本大学松商短期大学部の前身である松商学園短期大学が開学しています。

本学の使命・目的は「地域社会に貢献できる人材の育成」です。その目的を達成するために、総合経営学部・人間健康学部・教育学部の3学部と大学院（定員1,720人）、短期大学（定員400人）の構成により大学教育を実践しています（資料1）。このうち、

（資料1）



小学校や中学・高校の英語教員等を養成する教育学部が全学部の中で最も英語力を必要としています。

■ 大学を取り巻く4つの大きなテーマ

現在、大学は「入学定員の厳格化」「新学習指導要領」「大学入学共通テスト」「大学機関別認証評価」という4つの大きなテーマを突き付けられています（資料2）。

すでに入試の構造変化は起きています。

例えば最近、模試でA判定と出たにもかかわらず不合格になったり、4月1日頃になってようやく補欠合格者を繰り上げたりと、受験生を非常に困惑させていますが、これらはまさしく入学定員の厳格化が原因です。その影響がどんどん大学に広がっています。

本学のような地方の私立大学でも、その影響で志願者が増え、倍率もだいぶ高くなりました。そのために、学力の高い学生が入ってくるメリットがある反面、不

（資料2）

| 年度 | 2019 | 2020 | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2025 |
|-----------|-----------------------------------|-------------------|-------------|------|------|-------------|------|
| 入学定員厳格化 | 全面実施 | | | | | | |
| 新学習指導要領 | | 小学校 全面実施 | 中学校 全面実施 | 高校1年 | 高校2年 | 高校3年 | |
| 大学共通テスト | | スタート (現学習指導要領) | | | | 新学習指導要領での入試 | |
| 大学機関別認証評価 | 第3サイクルが2018年スタート 「内部質保証」が重点テーマ | | | | | 受審終了 | |

本意入学者が増えるリスクも高まりました。一般入試での入学生と推薦・AO入試での入学生との学力差も広がっています。

その状況をしっかりと踏まえ、入学後の手立てを考えなければなりません。そのような課題を今、我々は目の前にしています。

■「三位一体の改革」を意識し教育改革を推進

来年度からは新学習指導要領が小学校で全面实施となります。英語については、すでにほとんどの小学校で先行実施されています。大学入学共通テストも来年度から実施されることになっており、大学もこれを踏まえた教育改革に迫られています。

また、大学機関別認証評価も2018年から「内部質保証」を重点テーマとした第3サイクルがスタートし、学士力をきちんと可視化して世間に公表し、しっかり教学マネジメントのPDCAを回していくことが問われることとなります。

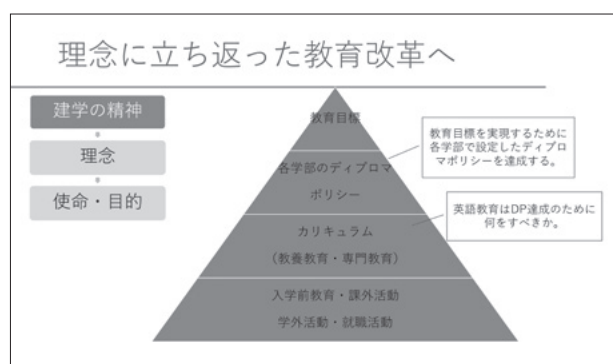
この入試改革、学習指導要領の改訂、大学教育改革の3つをセットにし、文部科学省では「高大接続改革」あるいは「三位一体の改革」と呼んでいます。本学でも、この3つにきちんと対応していくことを強く意識し、今、教育改革を進めているところです。

新学習指導要領では、高校までに「知識・技能」、「主体性・多様性・協働性・学びに向かう人間性」、「思考力・判断力・表現力等」の3要素を育成し、大学入試ではこの3要素に沿って選抜。それに合わせて記述式や論述問題を増やしたり、面接や調査書を活用します。そして、大学入学後も3要素をさらに高めることを目指しています。そのためにも私は大学教育を通じて身につけた3要素の能力を可視化する必要があると思っています。

■まずディプロマ・ポリシーを設定する

大学には、建学の精神を頂点に、理念そして、使命・目的があります。それらを踏まえた、ディプロマ・ポリシーやその達成のためのカリキュラムを設定し、実行・改善するのが「理念に立ち返った教育改革」の考え方です（資料3）。

（資料3）

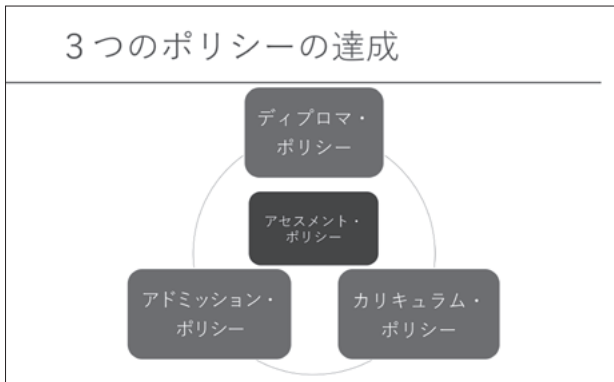


まず、大学の教育目標を達成するために、各学部でどんな人材をどう育成するかというディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）を定めます。これは学部が勝手に行うのではなく、大学全体の教育目標の下にそれぞれの学部がどんな役割を果たすのかを示します。そして、そのディプロマ・ポリシーを達成するためには、どんなカリキュラムが必要なのか、どのような方法で授業を行うのか、どのように評価するのかなどを示します。当然、英語教育もこのカリキュラムの一部という認識です。英語教育が独自に存在し、それで完結するというではありません。大学全体の教育目標の中で、英語教育をどう位置付けるのかという視点が必要であると考えています。

■大学教育改革を実現するための指針となる3つのポリシー

2017年より、各大学は3つのポリシーを策定・公開することが義務化されました。ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成方針）、アド

(資料4)



ミッション・ポリシー（入学者受入方針）の3つです（資料4）。ディプロマ・ポリシーは、卒業時点での人材育成の到達目標です。こういう人を卒業させます、こういう人に学士を与えますという方針になります。カリキュラム・ポリシーは、それを実践・達成するためにどんなカリキュラムをどう編成するかの方針です。そして、これから入学する新生に何を求めるかというのがアドミッション・ポリシーです。

図の中央のアセスメント・ポリシー（学修成果の評価の方針）は、3つのポリシーがきちんと機能しているか、達成できているかを測る方針です。機関レベル（大学）、教育課程レベル（学部・学科）、科目レベル（授業・科目）の3段階で学修成果を自己評価します。

■ 良い結果を出すことが最終的なゴールではない

ディプロマ・ポリシーの達成に向けて、英語教育はどうあるべきか、大学全体の中で英語教育をどう位置付けるのか、教育目標や学部のディプロマ・ポリシーとどのような関連性を持たせるのか。私はこれがとても重要なテーマであると思っています。

もちろん、専門教育と教養教育は全く別物だと考えている大学もあると思います。しかし、大学の教育目標にその共通教養やポリシーがどう反映されているのかは非常に大事です。英語カリキュラムとして、教養と専門はどんな関係にあるのか、どのような関連性を

持って3年次以降へつなげていくのかを考えることが大切です。

本学の理念である「地域社会に貢献できる人材の育成」では、英語においてTOEIC990点を取ったから達成しましたということにはなりません。英語教育で良い結果を出すことが最終的なゴールではなく、あくまでも英語教育を通じて地域社会に貢献できるマインドや能力を身に付けさせることが重要なのです。そうした認識をはっきりと持たなければいけないということです。

■ 将来、この地域がどうなるかを常に考えておくことが重要

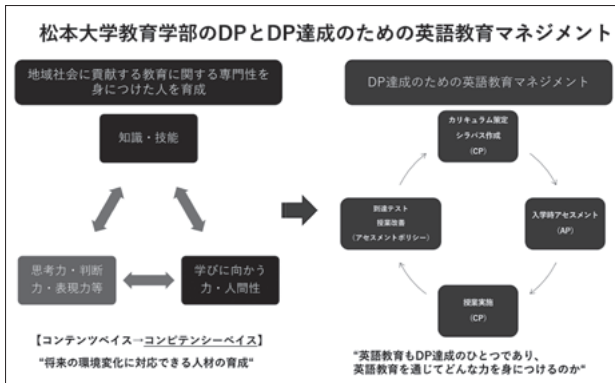
そのためには、今、大学が求められているのは何かをもう一度整理することが必要です。企業が新入社員にどんな力を求めているのか、親が子どもにどういう能力を身に付けてほしいと思っているのか、学生本人がどんな勉強をしたいのか、将来どうなりたいのかをきちんと把握しておかなければなりません。そして最も大事なのは、20年後、大学があるこの地域がどんな状況になっているのかを常に考えておくことです。それが地域の名前を背負った大学の一番の使命であると思います。これから少子化が進む中で、地域のために何ができるのか。そのことを踏まえながら、これからの大学の役割を本気で考えなければいけないと思っています。

■ 「やればできる!」のマインドセットが最大の目標

こうした大きな流れの中で、大学の英語教育はどうあるべきかというのが次のステップです。

なぜ大学で英語を学ばなければいけないのか。なぜ、わざわざ必修にするのか。なぜ英語だけ少人数で授業を行うのか。その答えを私たちがきちんと持っていなければなりません。答えを持っていない限り、ただ授業

(資料5)



をしているだけになってしまいます。

図(資料5)は、教育学部のディプロマ・ポリシーとそれを達成するための英語教育マネジメントの概念図です。地域社会に貢献する専門的な教育を身につけた人材を育成するためには、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性」という学力の3要素をコンテンツベースからコンピテンシーベースに変えていく必要があります。知識はすぐに役に立たなくなってしまうし、これまでは考えられなかった新たな課題が出てくることもあります。そうした将来の環境変化に対応できる人材の育成のために力を付けさせるということです。

一方、英語教育マネジメントで大事なものは、ディプロマ・ポリシー達成のために英語教育は何を担うのかを明確にすることです。本学では、特に「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」の2つの力を英語でどう養うかに重点を置いています。つまり、英語力の向上を通じ、「やればできる!」というマインドセットすることを最大の目標に掲げています。

■ 初年次の英語教育の役割は「見えない学力」を育成すること

その理由は初年次教育の重要性にあります。おそらくこの大学でも同じだと思いますが、1年次の成績が悪ければ卒業するまでずっと悪いという傾向があります。これは、学力が低いから向上しないというわけで

はありません。やる気やモチベーションが上がらないとすぐ出席なくなり、結局、単位が取れなくなるということです。やはり、初めのアプローチが非常に重要なのです。

初年次の英語教育の役割は、主体的に学修する姿勢を身に付け、「見えない学力」を育成することだと思います。そのためには、一人ひとりの学生に目が行き届くよう少人数の編成にすることが必要です。少人数ならば丁寧に教えられるし、欠席している学生もすぐに分かります。さらにペアワーク中心の授業にすれば、主体性やコミュニケーション能力も養われます。

1年、2年をかけてコツコツ続ければ、苦手である英語の点数も少しずつ上がっていきます。そうした経験をすれば、他のことにも通じる、学びに向かう意欲を醸成させることができると思います。

■ 全学共通教養としてTOEIC® Program 対策科目を選択科目に

次に、TOEIC® Programを活用した本学の英語教育についてご紹介します。

本学がTOEIC Programを採用したのは2014年。以来、英語教育に少しずつ力を注いでおり、現在は必修英語のほかに、全学共通教養としてTOEIC Program対策科目を選択科目に取り入れています(資料6)。

TOEIC Program対策科目は各学年に2科目ずつあり、選択する方式にしています。1年次はスコアアップ

(資料6)

| | 前期 | | | 後期 | |
|-----|--------------|---------------|------------------------|--------------|-----------|
| 1年生 | TOEIC Bridge | TOEIC I | TOEIC L&R | TOEIC II | TOEIC L&R |
| 2年生 | | TOEIC III | TOEIC L&R TOEIC S&W | TOEIC IV | TOEIC L&R |
| 3年生 | | TOEIC総合演習 I | TOEIC L&R TOEIC S&W | TOEIC総合演習 II | TOEIC L&R |
| 4年生 | | TOEIC総合演習 III | TOEIC L&R TOEIC S&W | TOEIC総合演習 IV | TOEIC L&R |

上記のほか正課外でTOEIC対策講座を開設：500点コース、600点コース、700点コース

を目標とするより、英語のトレーニング方法を身に付けることに重点を置いてレクチャーをしています。目標として2年間で500点を目指しています。

また教育学部では、教育科目以外に英語コミュニケーション系カリキュラムを用意し、4技能を意識しながら学生の英語力向上を図っています。うち1年次の「総合英語Ⅰ・Ⅱ／英会話Ⅰ・Ⅱ／TOEICⅠ・Ⅱ」と、

(資料7)

| 教育学部の英語コミュニケーション系カリキュラム | | |
|-------------------------|---|---|
| | 前期 | 後期 |
| 1年生 | 総合英語Ⅰ/英会話Ⅰ/TOEICⅠ ReadingⅠ | 総合英語Ⅱ/英会話Ⅱ/TOEICⅡ WritingⅠ |
| 2年生 | 総合英語Ⅲ/英会話Ⅲ/TOEICⅢ ReadingⅡ/Public Speaking/TOEFL演習Ⅰ | 総合英語Ⅳ/英会話Ⅳ/TOEICⅣ WritingⅡ/Discussion&Presentation/TOEFL演習Ⅱ |
| 3年生 | Communicative EnglishⅠ/TOEIC総合演習Ⅰ | Communicative EnglishⅡ/TOEIC総合演習Ⅱ |
| 4年生 | TOEIC総合演習Ⅲ | TOEIC総合演習Ⅳ |

赤字必修、上段が教養科目・下段が専門科目

(資料8)

Road Map / 2019年度 松本大学 TOEIC I

学籍番号: _____ 氏名: _____ クラス: _____

自己分析 (英語に限らず)

自分の強み、自慢できること、好きなどころ

自分の弱点、直したいところ

卒業後の夢 (将来の夢)

・職業や生き方

・卒業までの目標TOEICスコア

目標スコアに到達したら将来の夢はどう変わる? その職業で何が出来る?

前期の目標 2019年 4月

具体的に書こう!

・

・

・

前期振り返り 2019年 8月

目標達成率: %!

後期の目標 2019年 9月

具体的に書こう!

・

・

・

後期振り返り 2020年 1月

目標達成率: %!

英語のトレーニングを習慣化しよう ※単位修得に必要な英語学修時間は、最低週1時間!

| トレーニング内容 | トレーニング時間×1週間の回数 | 合計 (週) | 合計 |
|----------|-----------------|--------|-----|
| 例) 音読筆写 | 10分×5回 | 50分 | 75分 |
| 洋楽を聞く | 5分×5回 | 25分 | |
| 友達と会話練習 | | | |

スタート: 現在 2019年 4月

今の英語力

・ TOEIC Bridgeスコア

はできるが、

は難しい。できない。

す。1週間の学修スケジュールやCan-doリスト、半年後・1年後の自分、卒業後の夢や目標なども書いてもらいます。管理栄養士になるとか、社会福祉士になるとか、教員になるとか、何でも構いません。そして目標のスコアを取ったら、夢がどのように変わっていくかを具体的にイメージしてもらいます。例えば、管理栄養士が当初の目標だった学生がそこから、栄養失調になっている世界の子どもたちを助けたいというように夢は広がっていくかもしれません。やはり夢や目標を具体化させることが非常に大事だと思います。

■ レベル差があるクラスに有効な参加型授業

実際の授業は、学部横断の8クラス(約200名)で行っています。上位4クラスはTOEIC Bridge Testの結果で分け、TOEIC® Listening&Reading Test(以下、TOEIC® L&R)で授業をします。下4クラスはTOEIC Bridge Testで分け、そのままTOEIC Bridge Testの内容で授業を行っています。これらは半期ごとの科目ですが、できるだけ2年間、せめて1年間継続して履修するよう学生に促しています。

この授業では、前期・後期を通じて同じ先生が担当学生との信頼関係構築のために最低1年間は同じ先生に見ていただくということです。後期の最後には、それぞれのクラスでもう1度TOEIC Bridge TestとTOEIC L&Rを実施します。

授業のスタイルは参加型授業で、課題の答え合わせをペアやグループで行い、なぜその答えになったのかを話し合っています。特にレベル差があるクラスでは有効です。分かっている学生は定着しますし、分かっていない学生は理解が深まります。

■ 様々なインターネットツールを活用して

時間外学修ではeラーニングを積極的に活用しています。これも終了画面をペアでチェックしてもらいます。

ペアチェックと講師チェックとを比べても、実施率はペアチェックの方が断然高いという結果が出ています。

また、「ためになった問題」を書き取り、ペアで互いに出題しています。これは課題取り組みを実質化することが狙いです。

小テスト(学期中3回実施)もeラーニングから出題しています。宿題はあまり多く出題しても達成率は伸びません。小さいゴールをたくさんつくり、クリアする習慣を身につけてもらうことを意識しています。

先生とのコミュニケーションはLINEを使っています。LINEならば、スピーキング課題も音声吹き込んで送れるので便利です。最近Office 365を導入したので、今後はチャットツールであるTeamsなども使っていこうと思っています。

■ リアクションペーパーで授業を振り返る

授業の“振り返り”も大事です。特に必修科目では、学生と先生とのコミュニケーションが非常に大切だと思っています。そのため、毎回の授業でリアクションペーパー(大福帳)を活用し、分からなかった箇所を具体的にあげてもらっています(資料9)。その際も、3行、4行でもいいので、要望や気付いたこと、困ったことがあれば書いてほしいと伝えています。書いてもらったリアクションペーパーには必ずサインして返すようにしています。

授業が中盤まで進んでいった時点で模試を実施します。フルサイズ模試を行い、期末のTOEIC L&R 団

(資料9)

| 月/日 | 本日の振り返り | 印 | 月/日 | 本日の振り返り |
|------|---|---|-----|---------|
| 1 | | | 8 | |
| 5/19 | 2問-1が選択と見えなくなる 音読をもう少しせよ 嬉しいです。OK | | / | |
| 月/日 | 本日の振り返り | 印 | 月/日 | 本日の振り返り |
| 2 | | | 9 | |
| 5/16 | 代名詞の問題が二行ほど 分かった。特に前次から読めると なかなかに嬉しいです。 | | / | |
| 月/日 | 本日の振り返り | 印 | 月/日 | 本日の振り返り |

体特別受験制度 (IP : Institutional Program以下、IPテスト)までの学習方法をアドバイスします。同時に、ロードマップで作成した目標の達成状況を確認します。これを全学生に対し、1対1の面談で行います。1対複数では絶対に伝わらないものがあるので、たとえ5分でも行います。

授業後は、TOEIC L&R IPテストや模試の結果を踏まえ、半年間または1年間の学修を振り返って、後期や次年度の目標設定のアドバイスを行っています。また、学内に設置した英語相談室「イングリッシュカフェ」でネイティブと会話したり、アドバイスをもらったりしています (資料10)。

(資料10) イングリッシュカフェ



■ 学生が自主的に受験するようになりつつある

こうした取り組みによって、どのような変化があった

のかを表したのが下のグラフです (資料11)。左はTOEIC I～IVを履修した学生数の推移で、右はTOEIC L&R IPテスト受験者数の推移です。2018年度の履修者は2013年度時と比べると8.8倍に増え、受験者は2.6倍に増加しています。テストは強制していませんので、学生が自主的に受験するようになりつつあるということです。

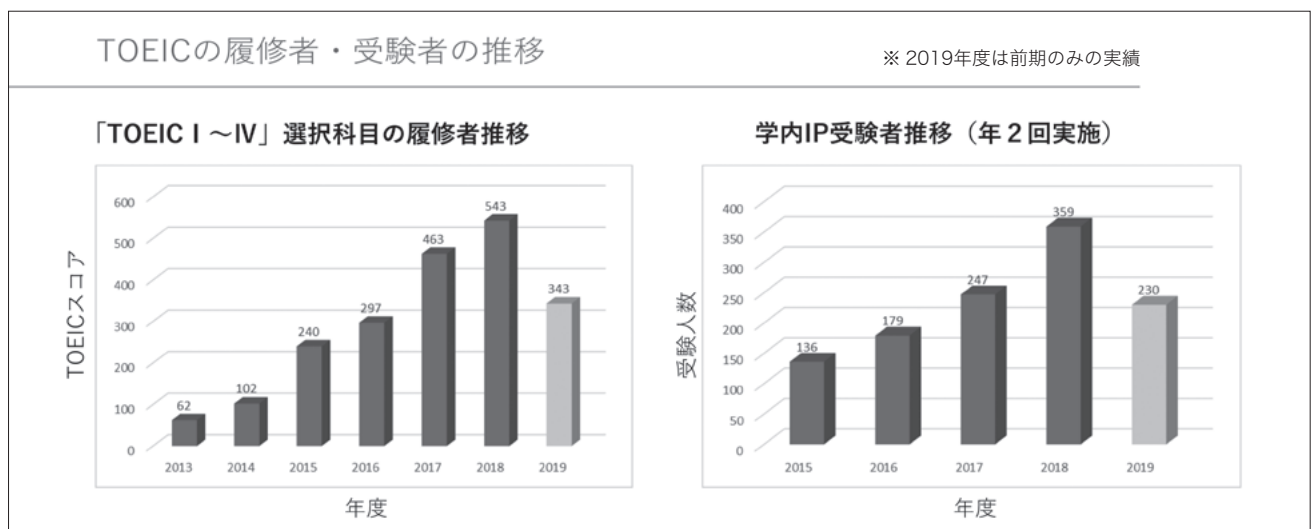
現在、入学時にTOEIC Bridge Testを行い、途中からTOEIC L&Rに変えていますが、始めからTOEIC L&Rにしても良いのではと思われるかもしれません。しかし、入学時にTOEIC Bridge Testで120点台でも、2年次前期にはTOEIC L&Rで500～600点に達している学生が結構多くいます。こうした状況を見れば、今のやり方は間違っていないのではと思っています。

■ テスト実施の大きな効果が出ている短期大学部

次に短期大学部での取り組みについてご紹介します。

4学期制を採用している短期大学部では、入学時にTOEIC Bridge IPテストを実施し、週2回の英語の授業1ターム(2か月間で15回)を行っていました。しかし、終了時のテストの結果はあまり変わりませんでした。

(資料11)



ほとんど伸びなかったということです。

そのため、今年度はその反省を踏まえ、もう1ターム増やしました（2学期目は選択）。その結果、平均点が4か月で約17点アップしました。得点層別では、160点を超える学生はそれほど伸びませんが、それ以外の学生は全ての層できれいに伸びてくれました。また、10点以上ダウンした人は全体のわずか3%でしたが、10点以上アップした人は全体の76%にのぼりました。このような大きな効果が出たので、来年以降も継続していくつもりです。

■ 不可欠な非常勤講師のサポート体制と協力関係の構築

最後に、グローバル化と英語教育についてお話しさせていただきます。

近年、我々のような地方大学では、グローバル化をどう捉えていくかが非常に重要な課題となっています。グローバル化はある意味チャンスだと思っています。その好機を教育にどう取り入れ、どう学生の成長につなげていくかがポイントです。そのためには英語教育で何をを目指すのか、何をどのように達成するのかというプロセスが非常に大事です。これはKPIマネジメントによる大学教育の内部質保証という観点からもきわめて重要です。

そして、目標達成のために何が必要かと言えば、教える先生の力しかありません。しかし、多くの大学では、少人数で行う英語教育は専任の先生だけでは対応できないため、非常勤講師の先生の協力を必要としています。大学によっては何百人という規模で必要になります。それらの先生方と複数のクラスの授業内容をどう調整していくのか、それが英語教育マネジメントの大きな課題です。

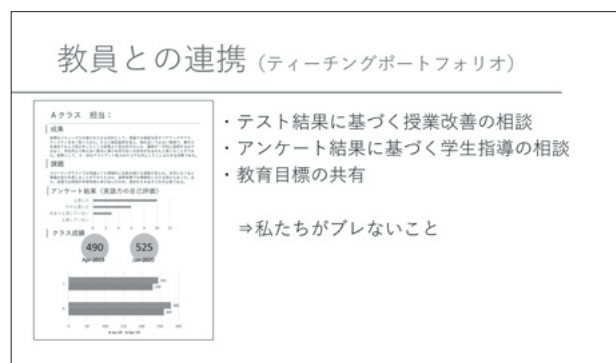
小規模である本学でも、英語の非常勤の先生は30～40人ほどおり、授業内容の調整や欠席の多い学生の“つなぎ止め”は非常勤の先生方をお願いしています。英語を教える以外の業務であるためサポート体制や協

力関係の構築は不可欠です。それなくしては絶対にうまくいかないと思います。

■ ティーチングポートフォリオを英語教育の改善に活用

その一環として、学生の学修成果を非常勤の先生方にも私からフィードバックしています（資料12）。テスト結果に基づく授業改善の相談や、授業評価アンケート結果に基づく学生指導の相談を行うためです。例えば、やる気のない学生にどうアプローチすれば良いのかという相談を受けた場合、非常勤の先生へのアドバイスの他、学生にもアドバイスをしています。教員・職員が協力して課題解決に向かうようにしています。さらに非常勤の先生方には、教育目標を定期的に共有し、目標と現状がブレていないかの確認も適宜行っています。

（資料12）

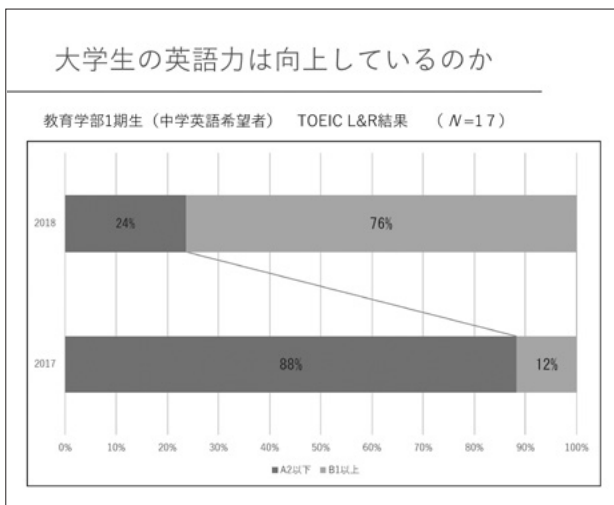


近年、教育改善や教育業績の評価を目的とした「ティーチングポートフォリオ」が注目されています。これは自らの教育活動を振り返った記述とその裏づけ資料で構成される教育業績の記録です。本学も、どんな課題や成果があり、どのようなアンケート結果やテスト結果が出たかなどの記録を各担当の先生に作成いただき、それを基に私がカウンセリングしています。普段の授業期間でも、気付いたことをその都度メールでいただくなどして、常に一緒に学生への対応を考えているからこそ、信頼していただけていると思っています。

これらの取り組みの結果、教育学部1期生(中学英語希望者)が受けた2017年度のTOEIC L&R IPテストでは、CEFRでA2以下の学生が8割以上でしたが、1年半後に逆転し、B2以上が76%になりました。今後は、この取り組みを全学に広げていきたいと思っています(資料13)。

大学生は4年間ありますが、1日の睡眠を8時間だとすると起きている時間はわずか2年8か月ほどしかありません。大学での授業時間では4~5%ぐらいです。学生には、そうした時間の中でポジティブに自分の人生を捉え、英語教育を通じて自信を付け、次のステップに進んでいってもらいたいと願っています。我々も地域のために、学生と一緒に今できることに1つずつチャレンジしていきたいと思っています。

(資料13)



質疑応答

Q ディプロマ・ポリシーには、グローバル化や多文化共生といった用語が入っていませんが、貴学ではディプロマ・ポリシーの達成と英語教育をどう結び付けているのでしょうか。

A 現在、教育学部では2021年に向けてポリシーの見直しを行っています。その中で、大学の理念と英語教育をどう結び付けるか、大学全体の中で英語教育をどう位置付けていくのかについての検討をしているところです。具体的には、教員養成の課程認定の変更等を踏まえながら、初等教育ではCEFRのB1以上の英語力の習得、中高英語教員ではB2以上の英語力の習得を目指し、それをカリキュラムに反映して、外部テストでの到達目標を設定していこうと考えています。

Q 一般的に、推薦入学で入ってきた学生は英語の習得にあまり熱心でない傾向がありますが、そうした学生にやる気を起こさせるにはどうしたら良いのでしょうか。

A 先ほど触れた入学前教育でのeラーニングも効果的だと思います。eラーニングはオンラインで、誰がどんな状況にあるのかを把握できますし、学習を促すこともできます。しかし、まずは英語の勉強が大切であることをしっかり伝えることが大事だと思います。

実は本学もeラーニングを実施しているのはまだ教育学部だけです。今後は、これを全学的に広げていきたいと考えています。

Q 入学前教育としてeラーニングを課していますが、なかなか課題に取り組んでくれません。そうした学生たちにどのように対応されているのでしょうか。

A 本学の推薦・AO入学生は地元の学生が多く、スクーリング授業を比較的容易に実施できます。その際に課題の進捗状況の確認や不安や不明点を相談できるようにしています。また、入学後にも入学前教育についてのアンケートを行い、大変だったとか、多すぎるとか、この時期はやめてほしいとかといった具体的な声を聞き、次年度の入学前教育に活かしています。

主体的な学びを引き出す 英語カリキュラムと TOEIC® Programの活用

岩手県立大学 高等教育推進センター 准教授 高橋 英也 氏
岩手県立大学 高等教育推進センター 助教 江村 健介 氏



高橋 英也 氏



江村 健介 氏

岩手県立大学の英語カリキュラム

岩手県立大学 高等教育推進センター 准教授
高橋 英也 氏

■ 学びを進める過程と学修の成果をセットにして「可視化」を考える

本日のテーマは「可視化」です。可視化というと、学修成果の可視化が強調されることもありますが、学生自身が成長を実感できる何かを念頭に置くことが最も重要であり、「学びを進める過程」とセットにして可視化を考える必要があります。

本日は、まず最初に、本学における英語のカリキュラムの変遷とTOEIC® Programの活用、そして可視化にどう取り組もうとしているのかについてお話しします。次はeラーニング科目の導入背景と狙いなどについてご紹介します。かなり特殊な事例かもしれませんが、本学では完全自学自習型のeラーニングを必修科目としていることをご紹介します。

■ 全国の学生震災復興ボランティア活動の中心的役割を担う

岩手県立大学は、岩手山と姫神山を望み、近くを北上川が流れる雄大な地にあります。1998（平成10）年に「自然・科学・人間が調和した新たな時代を創造することを願い、人間性豊かな社会の形成に貢

献する深い知性と豊かな感性を備え、高度な専門性を身につけた自律的な人間を育成する大学を目指す」ことを理念に開学しました。2011（平成23）年3月11日に発生した東日本大震災以降、様々な復旧・復興支援活動に携わり、今も継続して全国の学生の震災復興ボランティア活動の中心的役割を担っています。

学部は「看護学部」「社会福祉学部」「ソフトウェア情報学部」「総合政策学部」の4学部構成、1学年それぞれ100人程度という小規模な大学です。外国人留学生の受け入れなどの多様な国際交流を積極的に行うとともに、教員の海外派遣などの教育研究交流も推進しています。

地域の問題は世界の問題でもあります。そのため、地域教育や地域人材の育成の中に、グローバル化に対応した人材の育成を入れ込み、その中に英語教育を位置付けています。

■ 1クラス60名かつ学籍番号でクラス編成していた第1期

まず、英語教育の実施体制についてご紹介します。科目は全学共通の必修科目です。学校の規模が小さいので、4学部混成で実施しています。実施の主体は、私が所属する「高等教育推進センター 国際教育研究部」で、専任は6人（うち英語の母語話者1人）。英語教育は共通シラバス、共通テキストで行い、英語科目の一部は専任教員のみで実施しています。今のとこ

ろ、非常勤講師の大半は英語の母語話者ですが、岩手県は英語の母語話者の数が少なく、それが今抱えている問題の1つです。

本学の英語カリキュラムの変遷は、大きく3期に分かれます。第1期は、開学当時から数年間行われていた英語教育です。第2期で若干の修正があり、現在は第3期です。第1期・第2期と併せて、「旧カリキュラム」と呼んでいます。旧カリキュラムの科目名は英語表現Ⅰ～Ⅳで、目標は「文化の発信と受信を可能にする4技能の習得」です。具体性に欠けてはいますが、現在でも通用する目標であると思います。

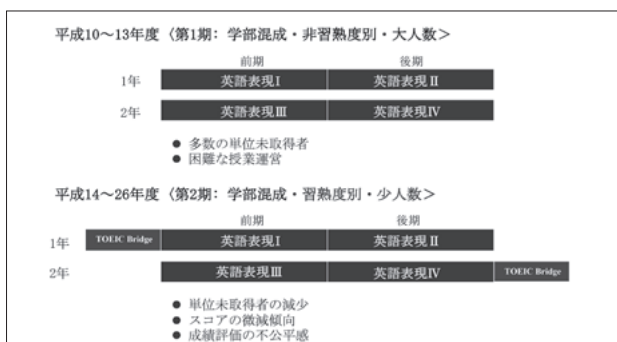
第1期では週2回英語の授業がありました。2年間必修です。ただし、習熟度別で分けず、4学部を学籍番号で切り、1クラス約60人で授業をしていました。第2期は少人数制と習熟度別のクラス編成を導入。少人数制といっても、1クラス25人ほどなので、今の基準では完全な少人数とは言えません。

そして英語の授業が週2回から週1回になりました。これはクラスサイズが半分になったので、授業も半分になったということです。

■ 可視化を目指しTOEIC Bridge® Testを導入した第2期

旧カリキュラムの詳細は下図の通りです（資料1）。第1期では、非習熟度別かつ大人数のクラス分けだったので、単位未取得者が大量に出るとともに、「教えるにくい」「学ぶにくい」という問題が生じました。第2

（資料1）

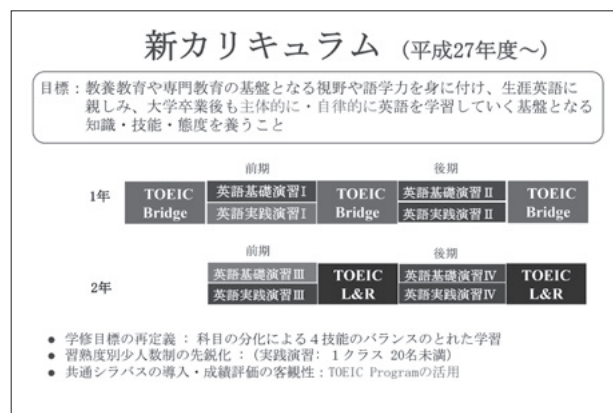


期では、習熟度別および少人数制とともに、TOEIC Bridge® IPテスト(*)を導入しています。

可視化に関して言えば、第1期は教育課程の成り立ちが全く見えないブラックボックス状態でした。第2期はTOEIC Bridge Testにより、入学生と2年次の学生の能力把握を行い、主に学生の実態は一応見えるようにはなりました。しかし、テストは成績評価に反映されませんでしたし、学生の動機を維持することが非常に難しかったため、2回のスコアの推移は微減傾向にありました。大学内外の英語教育を取り巻く環境の変化に応じる形で、2013～14年度頃にカリキュラムの抜本的な改編を求める声が上がリ、2015年度から第3期の新カリキュラムの導入となりました（資料2）。

(*) IP：Institutional Program：団体特別受験制度

（資料2）



■ “気付き”を持ってもらうための新カリキュラム

新カリキュラムでは、まず目標を変えました。本学には「看護師の資格を取るために入学しました」「社会福祉士になって地域に貢献したい」「公務員の試験に受かって県庁職員になりたい」という学生が数多くいます。そして、学生の置かれた環境は、ある意味、グローバル化とは逆の非常にローカルなものです。そうした学生に対して、どう英語教育を授けたらいいのかという点から考え直しました。

特に、学生は英語力が必要だということに気が付いていないのではないかと、ならばそれを気付かせるところから始めようと考えたわけです。例えば、ソフトウェア情報学部の学生は相対的に英語力が高くありませんが、本当は彼らこそ英語力が必要と言えます。そのため、例えば、「英語が分からなくて、どうやってプログラミングするの?」などと、専門との接点を手掛かりに疑問を投げかけ、“気づき”を得られるよう配慮しました。

多くの学生達に対して、少なくとも専門教育の基盤となる視野や学力は身に付けてもらいたい、そこから先は、今は必要ないかもしれないが、生涯にわたって英語に親しんでもらいたいと思っています。中には辞書の引き方すらままならないような学生もいますが、本当に英語が必要だと思ったときに、どうやって英語を勉強したら良いのかという技術と態度は身に付けて卒業させたい。その思いで新たな目標を掲げました。

■ TOEIC Bridge® Testを橋渡しに TOEIC® L&Rへとつなげる

さらに、より理想的な可視化の達成を目指して、テストの活用も大きく変更しました。入学時にTOEIC Bridge IPテストでクラス分けをすることは変わっていませんが、1年次の前期終了時と後期終了時にもTOEIC Bridge IPテストを行い、2年次前期終了時と後期終了時にはTOEIC® Listening&Reading IPテスト(以下、TOEIC® L&R IPテスト)を行うようにしました。学生に対して学びの途中段階をきちんと見せてあげたいし、我々もそれぞれの段階での学生の実態をしっかり把握したいので、セメスターの末ごとにテストを実施するようにしました。年次の進行によるTOEIC Bridge TestからTOEIC L&Rへの「積み上げ」については、未だ議論の余地はありますが、文字どおり“Bridge”が橋渡しの役割を担い、スムーズにTOEIC L&Rへとつながってくれればと考えています。

■ 基礎演習は専任教師が責任を持って担当

また、新カリキュラムでは英語教育プログラムの骨子を「英語基礎演習」と「英語実践演習」の2つの科目の相互作用として捉え直し、4技能教育への対応を考えました。基礎演習は主にインプット、実践演習は主にアウトプットに特化した授業です。基礎演習は専任教員のみによる体制で責任の所在を特に明らかにし、他方、実践演習は英語母語話者の非常勤による担当を重視しました。

外国語の学習はスポーツに似ているとよく言われます。例えば野球では、指導者から基本的な体の動きなどを教わって、毎日素振りを繰り返せば、それが習慣となり、やがて自分のものになっていく。そうなれば、実際のゲームでも自然と体が動くようになります。

英語の習得でも全く同じです。最初の基礎的な知識を確立するには、きちんと「指導」することが必要です。そのため、基礎演習の運営は専任教員の責任と考えました。結果として、シラバスやテキスト、成績評価の算出方法も全て4学部共通にすることができました。

■ 基礎演習の成績はTOEIC Bridge® Testなどで評価

2年次の基礎演習は、1年次に確立した知識を基に、良質の教材を使って何度も反復し、英語の処理能力を自動化させることが狙いです。このプロセスは人間の教員が行うよりも、好きな時間に学べるeラーニングの方が適していると判断し、eラーニング科目を導入しました。

そして、素振りで基本を学んだ学生が実際のゲームを行う場として、実践演習の科目を位置付けました。ここではアウトプットを重視した実践的な英語コミュニケーション能力を養成するため、習熟度別の少人数制とし、1クラス20人程度で行っています。

英語基礎演習の成績評価は、TOEIC Bridge Testの結果で傾斜を付けて決めています。上級クラスの成

績はテストが40%、中級クラスは60%、初級クラスは80%の割合です。

上級クラスの割合が低いのは、上級の学生は天井効果があると見ているからです。逆に言えば、初級クラスの学生はTOEIC Bridge Testを使った英語の勉強をすれば効果があると見ています。上・中・初級クラスそれぞれの評価における残りの60%、40%、20%は、授業内外の課題演習などの評価が占めています。

■ 学生の主体的な学びを引き出すカリキュラムにするために

旧カリキュラムと新カリキュラムの年度別スコアアップ率を見比べてみます。2012年度の3月と2013年度の2月(旧カリキュラム)に行ったTOEIC Bridge Testの比較は、5.1点のマイナス。プレースメントテストのみを実施する大学で共通に見られる微減傾向です。一方、2017年度の4月と2018年度の1月(新カリキュラム)に行ったTOEIC Bridge Testの比較は、6.0点のアップです。中でも中級クラスと初級クラスが伸びています。

この結果からも新カリキュラムの効果は顕著に表れていると言えます。もちろん、外部テストであるTOEIC Bridge Testを授業科目や成績の中に組み込むことが議論的となることはありますが、TOEIC Bridge Testを活用することで成果が表れてきていることを実感しています。今後も、学生の主体的な学びを引き出す英語カリキュラムにするために、TOEICプログラムを上手に活用していきたいと思っています。

eラーニング科目の導入背景と狙い

岩手県立大学 高等教育推進センター 助教

江村 健介 氏

■ 「完全自習型」のeラーニングを採用

ここからは、eラーニング科目の導入背景と狙いについてご紹介します。

導入背景である学習時間・学習量の絶対的不足(1学期:90分×15回)と、集中的な学習の不足(週1~2回の授業)、過密化する時間割については、先ほど高橋からご説明したので省略します。

もう1つの導入背景は、2~3か月程度の短期間学習でも、テストのスコアアップに有効であるという多くの先行研究があったからです。現在、eラーニングなどの英語科目を導入している大学は全国で8割以上にのぼるといわれており、この数字自体が効果を現わしていると思います。これらの背景から、本学では新カリキュラムの開始とともに、eラーニング科目を導入しました。

導入にあたっては、「完全自習型」を採用しました。これは受講者の自律的な学習習慣の涵養を目指すことと、短期間で大量にインプット(リーディング40の大問、リスニング800問、文法740問)すること、受講者の英語処理能力の自動化を図ることが狙いです。

完全自習型だからといって、教員は何もしなくても良いわけではありません。むしろその逆で、1週間ごとに消化期限と消化ノルマを設け、厳密に学習管理を行っています。完全自習型ではありますが、学習の質を担保してあげるといえることです。

学期末にはTOEIC L&R IPテストの受験を義務付けています。これで学習の動機付けと学生のキャリア支援を行うと同時に、結果の可視化と成績評価の一元化を図っています。

■ ガイダンスはテーマを絞り時間をかけて説明

具体的な履修スケジュールは、まず年度始めの4月に受講者(約500人)を集め、学習方法や学習期間、成績評価、学習データとTOEIC L&Rスコアの関係性などについてのガイダンスを行います。そこでは、ただ単に「eラーニングをやりなさい」と言うのではなく、前年度までの受講者のデータや先行研究の知見を基に、実際に何に気を付けるべきなのか、何が大切なのかを4~5テーマに絞り、配付資料を使いながら、時間をかけて説明しています。

前期の学習期間は、通常の授業と同じ15週間。受講者はパソコンやスマホなどを使い、自分のペースで自学自習を進めていきます。学習期限は毎週水曜日の11時。学習時間・消化率・正答率・解説確認率などの学習記録を掲示板にアップし、最新情報をフィードバックします。ノルマ未達成の受講者に対しては対応や面談を行い、学習意欲の喚起を図っています。

■ 効果のある“問題のよみがえり”

今年度は8月にTOEIC L&Rを実施しました。

リーディングは1つの大問につき10前後の設問で構成しています。いずれも4択の問題ですが、適当にクリックすると、次には進めません。適当に入力したり、不適切な学習をすると、コンピューターが自動的にはじくようになっています。また、70%以上を正解しないと、間違えた問題がまたどこかのタイミングで蘇ってきます。我々は“問題のよみがえり”と呼んでいます。この蘇りのシステムは学生の間ではあまり評判が良くありませんが、これで良い結果が出ているので今も続けています。

リスニングはイラストを見て解答する形式です。各スクリプトと和訳が記載され、これを見ながら繰り返し音声を聞くことができます。

本学のeラーニングの特徴は、随所に詳細な解説が

(資料3)



付いていることです(資料3)。その解説を確認する確率が高ければ高いほど、スコアが伸びることが分かっています。そのため、正解したかどうかを問わず、解説の確認率100%を目指すように指導しています。

■ 毎週のノルマを設定した学習プラン

学習プランも大切です。下表(資料4)は最低限しなければならない課題を毎週、一覧で表したものです。新カリキュラムの目標は、大学卒業後も自律的に英語を学習していくための基盤となる知識や体力を養うことです。学習プランの作成はその学習習慣の定着を目指しています。

(資料4)

| | 消化期限 | 消化課題番号 | | | |
|------|-------------------|---------|------------|-----------|---------|
| | | Reading | Vocabulary | Listening | Grammar |
| 第1週 | 4月24日(水) 午前 11:00 | No. 2 | No. 2 | No. 38 | No. 35 |
| 第2週 | 5月1日(水) 午前 11:00 | No. 4 | No. 4 | No. 76 | No. 70 |
| 第3週 | 5月8日(水) 午前 11:00 | No. 6 | No. 6 | No. 114 | No. 105 |
| 第4週 | 5月15日(水) 午前 11:00 | No. 8 | No. 8 | No. 152 | No. 140 |
| 第5週 | 5月22日(水) 午前 11:00 | No. 10 | No. 10 | No. 190 | No. 175 |
| 第6週 | 5月29日(水) 午前 11:00 | No. 12 | No. 12 | No. 228 | No. 210 |
| 第7週 | 6月5日(水) 午前 11:00 | No. 14 | No. 14 | No. 266 | No. 245 |
| 第8週 | 6月12日(水) 午前 11:00 | No. 16 | No. 16 | No. 304 | No. 280 |
| 第9週 | 6月19日(水) 午前 11:00 | No. 18 | No. 18 | No. 342 | No. 315 |
| 第10週 | 6月26日(水) 午前 11:00 | No. 20 | No. 20 | No. 380 | No. 350 |
| 第11週 | 7月3日(水) 午前 11:00 | No. 22 | No. 22 | No. 418 | No. 385 |
| 第12週 | 7月10日(水) 午前 11:00 | No. 24 | No. 24 | No. 456 | No. 420 |
| 第13週 | 7月17日(水) 午前 11:00 | No. 26 | No. 26 | No. 494 | No. 455 |
| 第14週 | 7月24日(水) 午前 11:00 | No. 28 | No. 28 | No. 532 | No. 490 |
| 第15週 | 7月31日(水) 午前 11:00 | | | No. 569 | No. 518 |
| | 問題のよみがえり | 2 個毎 | なし | 38 個毎 | 35 個毎 |

15週目: 各教材の70%分の課題番号

問題数はたくさんあるものの、夜通しやれば1か月でできない量ではありません。ただ、そうすると学習の質が粗くなり、スコアも思うように伸びないことが分かっています。そのために毎週ノルマを設けています。

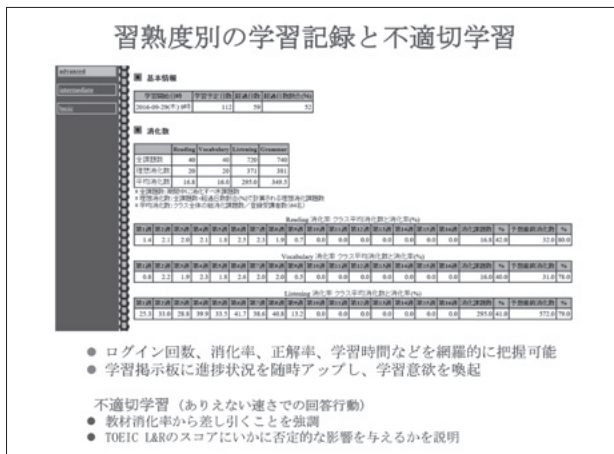
ノルマを達成できない場合は、自動的にアカウントが停止し、必ず教員の面談を受けなければならないようになっていきます。我々教員も大変ですが、本学の規模ならば、何とか対応できる範囲にありますし、大半の学生も真面目に受けてくれています。

表の一番下(第15週)の数字は各教材の70%分の課題番号です。「学習習慣の定着」と「TOEIC L&Rスコアの向上」を図るために、70%分の教材消化を単位取得の最低条件として設けています。

■ 不適切学習をなくすにはマイナス影響を示す

下表(資料5)は習熟度別の学習記録です。ログイン回数・消化率・正解率・学習時間などを網羅的に把握することができます。これらのデータを基に、毎週最新情報をアップデートし、学習意欲を喚起していきます。

(資料5)



問題は不適切学習です。不適切学習は完全自習型に付きものですし、完璧に排除することはできません。ただ、受講者全体のテストの平均点に関わってくるため、いかに抑止するのかが教師にとって非常に重要な課題です。本学では、不適切学習の場合は成績から差し引くことを事前に伝えるとともに、不適切学習の割合が高いと実際のスコアにどんなマイナス影響が出る

のかを具体的にグラフで示しています。これらにより、ほぼ不適切学習はなくなっています。

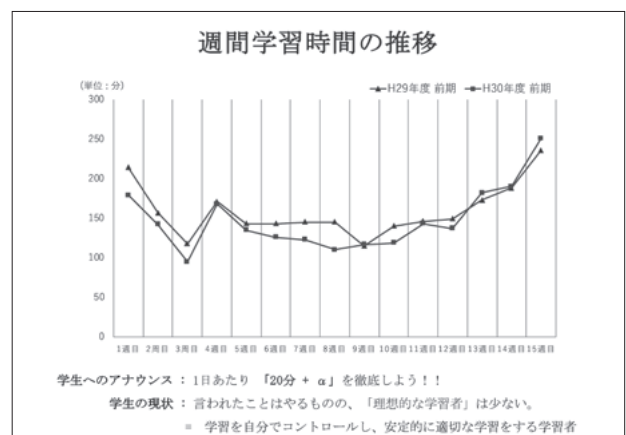
成績評価は、教材消化率とTOEIC L&Rスコアで算出しています。本学には、英語を専門とする学部が存在せず、大半の受講者には、学習習慣が定着していないと推察されること、及びTOEIC L&Rで、必ずしも望ましいスコアが取得できるとは限らない可能性を考慮して、教材消化率のウェイトを手厚くした配点としています。7割が教材消化得点で、3割分がTOEIC L&Rスコアです。このことは、学生自身がセルフコントロールし、学習習慣を定着するよう、4月のガイダンスで伝えていきます。

教材消化率は70%が単位取得の最低条件ですが、両年度とも90%以上になっています。この数字は、適切に学習管理を行うことができれば、たとえ英語が専門ではない学生が、eラーニング科目を完全自習型で受講したとしても、100%近く取り組んでくれるということを示唆しています。

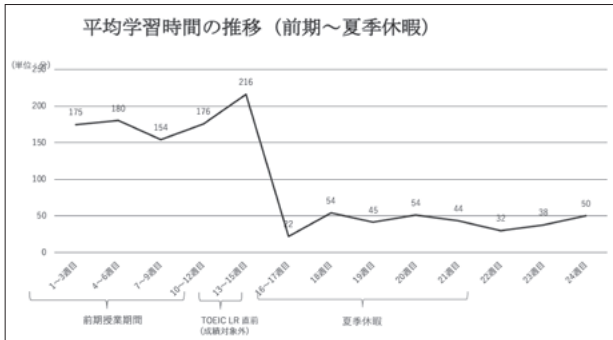
■ 長期休暇中の学習に教員がどう関わるかが今後の課題

下のグラフ(資料6)は、学習時間の推移を表したものです。学生には、「1日20分+α」は勉強しようとしています。実際、その通りに取り組んでくれますが、ゴールデンウィークに当たる3週間目は一気に下がります。

(資料6)



(資料 7)



逆に、前期の成績評価前の14週目、15週目には一気に上がります。言ったことは最低限はやってくれるものの、まだまだ理想的な学習者は少ないという状況です。

また、上のグラフ(資料7)は、前期開始から夏季休暇終了までの平均学習時間の推移を表したものです。夏季休暇中の学習時間がガクンと落ちています。

英語の教員が、教養科目や専門科目の基盤となる英語力の育成を求められているのであれば、授業期間中のみ関わっていれば良いということにはなりません。特に、2か月弱にもわたる、長期休暇については、何らかの関わりが必要です。夏季休暇中に授業を行うことは困難ですが、eラーニングならば365日24時間どこでもできるので、活用の可能性は十分にあります。

長期期間中の学習の関わり方をどうするか。今後はこの課題に積極的に取り組んでいきたいと考えています。その意味で、テストのスコアがかなりアップしてきているという現状は、我々を大いに励ましてくれています。次に、eラーニング科目を受けて結果を出した学生の声を紹介します。毎年、入学生向けに何人かの先輩のビデオメッセージを上映していますが、そのうちの1人です。

新入生に向けたビデオメッセージ

岩手県立大学 ソフトウェア情報学部 2年生

■ 世界共通語を理解できれば学べることは格段に広がる

ソフトウェア情報学部2年の学生です。大学入学前までは、それほど英語を集中して勉強したわけではなく、受験に必要な最低限の勉強しかしていませんでした。

前期末に行ったTOEIC L&Rでは600点台でしたが、段々と将来の目標が見えてきたので集中的に英語の勉強を始め、後期末には700点台に上げることができました。しかし、まだまだ満足はしていません。次の試験で900点台を取れるように勉強している最中です。

私の目標は外資系企業で働くことです。そのため、仕事関係の求人を見たり、インターネットで調べたりするとともに、いろいろな分野の勉強をするようにと自分に言い聞かせて、モチベーションを高めています。また、英語は継続することが最も大事なので、毎日勉強しています。ただ、それだけではなかなか続かないので、自分の好きなこと、例えばゲームやスポーツなどを無理のない程度にやると同時に、1日の英語の最低量を決めて勉強しています。それがモチベーションを保つ自分流の方法です。

私が望んでいる仕事に英語力は不可欠ですが、皆さんが将来社会に出たときにはどんな仕事でも英語力が必要になっていると思います。今では岩手にもたくさん外国の方が来ていて、英語を使う機会が増えていきます。今、しっかり英語を勉強しておけば、将来必ず強みになりますし、自分の好きなことにも役立ちます。例えばサッカーであれば、プレミアリーグをテレビ観戦するときに解説を理解できますし、現地での観戦ならば試合後に外国人と感想を言い合うこともできます。今や英語は世界の共通語です。その言語を理解できれば、学べること、楽しめることは格段に広がります。

まとめ

岩手県立大学 高等教育推進センター 准教授

高橋 英也 氏

■ 英語力を付けるには英語教育の全体で考える

最後に、現在の我々の関心事について2つほどお話しさせていただきます。

前期にいくら頑張っても夏休みにやらなければ元の木阿弥になるということは、英語の教員であれば誰でも肌感覚として持っています。また、多くの学生は例えば英検で2級を取れば、永遠に自分が2級だと思っ込んでいます。TOEIC L&Rのスコアで500点を超えても、夏休みが終わったら350点ぐらいに落ちているかもしれません。共通教育2年間を預かり、その2年間で英語力を付けるためには全体をどのようにしていけば良いのか。それを考えなければならないのが第1点です。

それには、やはり長期休暇期間が大きなポイントになります。どのような形であれば、長期休暇中の継続的な学習も含めて、2年間しっかり勉強してもらえるのかを考えなければなりません。

■ 最も大事なのは学生が実感できる何かを示すこと

もう1つは、学生自身が実感できる何かを示すことです。今のところTOEICスコアが何を意味しているのかについて、我々は学生に対して何も明らかにしていません。「500点取って良かった」とか、「450点か、もうちょっと頑張ろう」とか、「700点超えた。素晴らしい」とは言いますが、そのスコアが何を意味するのは示されていません。

しかし、それをきちんと学生に示してあげることが最も重要だと思っています。そのため、現在、本学版の

CAN-DOリストを作成しているところです。例えば、看護師ならば、この程度の英語力があれば看護師としてどんな英語のコミュニケーションが取れるのかということまで示そうと考えています。キャリア教育や専門教育も含めた全学のディプロマ・ポリシーの中の英語を考える契機としても、ぜひ、つくりあげたいと思っています。

質疑応答

Q 新カリキュラムでは1年次でTOEIC Bridge® Testを3回、2年次でTOEIC® L&Rを2回、計5回のテストを受ける機会がありますが、その費用は学生が負担しているのでしょうか。

A 入学前のテストも含め、全て授業で使える予算の枠の中で行っています。学生の英語力向上のために我々も努力し、大学と掛け合ってお出してもらっています。

Q 英語基礎演習Ⅰ・Ⅱで使われている統一テキストはオリジナルでしょうか。また、その中にTOEIC Bridge® TestやTOEIC® L&Rの対策などは入っているのでしょうか。

A 本学では市販のテキストを使っています。英語の専任教員6人が英語教員会議を開き、科目の目標に合っているもの、より良いものを1冊選んでいます。本来ならば自前でテキストを作るのが理想かもしれませんが、即座には難しいところがあります。テスト対策については行っていません。必修科目の科目名は「英語基礎演習Ⅰ・Ⅱ」で、TOEIC Bridge Test演習ではありません。つまり、この科目はアウトプットの土台となる基礎知識を学ぶ授業であり、先ほど野球に例えたように、どのようにスイングすればよく飛ぶのかを教員と一緒に学ぼうという授業です。そのため、専任教員間の申し合わせとして、テスト対策はしないようにしています。

Q eラーニングはどのような教材を使っているのでしょうか。

A 「ぎゅっとe」という教材を使っています。英語の授業をただ漫然と1、2年間やってもあまり効果は期待できません。逆に、危機感を持ち2～3か月で“ぎゅっと”詰め込んでやれば、100点上がる学生も

います。この教材は文字どおりのネーミングとなっています。

オンライン環境があれば、基本的にはいつでもどこでも運用できます。出題形式はTOEIC L&Rに準拠していますし、費用も手ごろです。完全自習型を採用している本学にとっては、学習管理と4月に行うガイダンスが特に重要となっています。

発行月：2019年11月

発行：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)

東京

〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル
TEL (03) 5521-5012

名古屋

〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル
TEL (052) 220-0282

大阪

〒541-0059 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル
TEL (06) 6258-0222

公式サイト

<https://www.iibc-global.org>

ETS, the ETS logo, PROPELL, TOEIC and TOEIC BRIDGE are registered trademarks of Educational Testing Service, Princeton, New Jersey, U.S.A., and used in Japan under license.

本書の無断転載・複製を禁ず

IIBC 世界は、あなたでつながる。

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
The Institute for International Business Communication